

特集：ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

ヘレン、リリー、メアリー

— アメリカにおけるワイルドを再考する

原田 範行

1. はじめに

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)は、『獄中記』(完本刊行は1962年)において、芸術家としての自らの立場を表明し、「現代における芸術および文化とのさまざまな象徴的關係の中に私は立っていたのだ」(*Complete Works* 2: 162)と述べている¹。ワイルドが現代における「芸術および文化」と取り結んだ「象徴的關係」には、もちろんさまざまな要素が考えられるが、少なくとも次の二つの点には留意する必要があるだろう。一つは、彼の言う「芸術および文化」の視野が、アイルランドやイギリス、あるいはヨーロッパにとどまらず、それを越えて地理的に広がっていたということ、もう一つは、先の引用に示されているワイルドの明確な主体性にもかかわらず、社会が創り出す「ワイルド像」と言うべき彼の姿が生前から並存していて、彼の主体性はむしろこの「ワイルド像」を包摂する形で形成されたのではないか、ということである。

第一の点については、例えば彼が、「中国の賢者」として荘子の思想に関心を持ち、その「辛辣な批評(the most caustic criticism)」に強く惹かれていたことや、1882年のアメリカ講演旅行の際、日本へ渡航することを視野に入れていたという事情などからも容易に推察できよう²。また、第二の点については、特に近年の伝記研究でも主要な視点になっている。ワイルドは、主にジャーナリズムや社交界を舞台に生み出された自らの像を意識しつつ、自身の主体性を創作活動に織り込んでいった。その相互関係を見事に検証しているのが、ホーファーとシャルンホルストが編纂した『ア

メリカのオスカー・ワイルド—インタヴュー録』(2013)やフリードマンの『アメリカのワイルド—オスカー・ワイルドとモダン・セレブリティの誕生』(2014)、フィッツサイモンズの『ワイルドの女性たち—オスカー・ワイルドはいかにして彼の知る女性たちによって作られたか』(2016年)、メンデルスンの『オスカー・ワイルドを創る』(2018)、ギレスピーの『オスカー・ワイルドをブランド化する』(2018)、スタージスの『オスカー—その人生』(2018)といった伝記的研究書であると言ってもよいであろう。

このような視点や研究動向を勘案するとき、改めて重要性を増すと考えられる項目の一つが、アメリカにおけるワイルドの言動とそのさまざまな影響である。周知の通りワイルドは、1882年、約一年にわたってアメリカに滞在し、各地で150回におよぶ講演をおこなっている。翌83年にも彼は、一か月間、アメリカに滞在した。オクスフォードを優秀な成績で卒業したものの、美術評論数点を発表しただけの青年ワイルドにとってこの講演旅行は、フリードマンが指摘する通り、「実績があって名前が広まるのではなく、名前を広めてから実績を作る」(Friedman, *Wilde in America* 14)重要な機会であった。まさに「ワイルド像」が先にあって、それを意識しつつ、自らの主体性を研磨していくことになるのである。そういう機会を彼は、アイルランドやイギリス、ヨーロッパからいったん離れ、アメリカにおいて存分に活用したのである。アメリカにおけるワイルドの様子は、もちろんほぼ同時的にある程度はイギリスでも紹介され、また、「アメリカの印象」といった帰国後の彼の講演などによってイギリスおよびヨーロッパでも広く知られることになるのだが、しかし、そういうワイルドの姿は、イギリス・ヨーロッパにおいて生み出されたものではない。むしろ、アメリカこそ生みの親であったと言えよう。

本論文の目的は、ワイルドの経歴の出発点にして原点と言ってもよいこのようなアメリカにおける彼の言動とその影響を、先行研究では必ずしも十分に触れられていない次の三つの視点から考察しようとするものである。一つは、講演旅行の興行主として、まさにアメリカにおける「ワイルド像」創作に腐心したリチャード・ドイリー・カート(Richard D'Oyly Carte)のビジネス・パートナーであったヘレン・ルノワール(Helen Lenoir、後にHelen Carte)の視点から、二つ目は、ワイルドと同時期にアメリカに

滞在し、女優としての地歩を固めつつあったリリー・ラングトリー (Lillie Langtry) とワイルドとの交流から、そして第三に、アメリカにおけるワイルド関係資料の収集に貢献し、彼の作品が文学史上に定位されるにあたって大きな役割を果たしたメアリー・モーレイ・クラッポ・ハイド・エクルズ (Mary Morley Crapo Hyde Eccles) によるワイルド・コレクション構築の意義について、である。こうした視点からの考察によって、ワイルドが「芸術および文化」と取り結んだもろもろの「象徴的關係」に迫る手がかりを、アメリカを軸にして得たいと考えている。

2. ワイルドを創る——ヘレンが見た講演旅行の舞台裏

1882年のワイルドの講演旅行が、いわゆるサヴォイ・オペラの傑作『ペイシャンス』のアメリカ公演を前に、その準備として企画されたことはよく知られている。審美主義への風刺を旨とするこの作品が好評をもって迎えられるためには、その風刺性が理解されなければならないが、ロンドンでの上演とは異なり、はたしてアメリカの観客にそれが通じるだろうか——アメリカでの成功は大きな収益をもたらすが、他方でそうした懸念が、興業主であるドイリー・カートにはあった。彼はさっそく、ニューヨークのブロードウェイにあった彼の事務所で働いていたヘレン・ルノワールに相談する。ヘレンは、1877年以降、ドイリー・カートの事務所に勤務し、上演の細部の調整や著作権の処理、役者との細かな交渉などに采配を揮っており、当時は、ニューヨークに滞在していたのである。彼女からの回答は実に明快で、「イギリスにいる本物の審美主義者をアメリカに送り込み、『ペイシャンス』において風刺されるバンソーンと同じような格好をさせてブロードウェイを歩かせてはいかが」(Friedman, *Wilde in America* 50) というものであった。このアイデアを採用したドイリー・カートは、ロンドンの社交界で注目を集めつつあった若きワイルドを抜擢することとし、さらに念を入れて、ヘレンとともにアメリカの事務所にいたW・F・モース (Colonel W. F. Morse) にワイルドへの電報を送るように指示した。ロンドンからではなくニューヨークからの依頼が届くことで、ワイルドは、アメリカでの講演旅行の支援体制が整っていることを理解するとともに、何より、アメリカでの知名度の高さに気をよくするはずだ、とのドイリー・カー

トの判断によるもので、実際、その通りに事は運んだのである³。

ワイルドの講演旅行実現に際して、まずはヘレンのアイデアが大きな役割を果たしたのだが、彼女はその後、半年間にわたってニューヨークにとどまり、講演旅行の細部についてワイルドとの重要な調整役を果たしていたことがうかがえる。マーリン・ホランドとルパート・ハート・デイヴィスによる『書簡集』に収録されたやり取りに見られる通り (*Letters* 130-31, 138, 141, 146, 155-56などを参照)、ワイルドはアメリカ到着早々から、ドイリー・カートおよびモースに、講演料の詳細から付添人の手配に至るまで、実にさまざまな細部を問い合わせているのだが、その一つ一つに対応する実務を担っていたのは、ドイリー・カートやモースではなく、ヘレンであったと推測されるからである。例えば1882年1月24日付書簡でワイルドは、ドイリー・カートに対して、「私の付添人はまったくひどい間抜け野郎 (a fool and an idiot)」で、これでは仕方がないので変えて欲しいと伝えている (*Letters* 130)。結局、モースがワイルドの付添人になったと思われるが、今度は、そのモースにワイルドは、実に細々とした要求を送ることになる。だが、ロンドンのドイリー・カートはもちろん、ニューヨーク事務所であって業務多忙であったモースも、ワイルドの要求の一つ一つに応じていたとは考えにくい。そうであるとすれば、『書簡集』に見られるワイルドとドイリー・カートおよびモースとの細かなやり取りについて、その実質的な対応をしていたのは、ニューヨーク事務所に勤務していたもう一人の職員、すなわちヘレンであったと考えられるのである。

現在のこの『書簡集』には、ワイルドからヘレンへ、もしくはヘレンからワイルドへ宛てた書簡はまったく採録されていない。だが、ヘレンとワイルドとの間で、講演旅行実施にかかわる細かなやり取りが、『書簡集』に収録されるような記録に残る形ではなく、おそらくはより日常的なレベルでなされていたであろうことは、彼女が散発的に残している記録や回想などから推察することができる。基本的にヘレンは、こうした記録や回想においてもあまり多くを語ってはいないのだが、例えば、ワイルドの講演旅行から三年後の1885年、彼女は『南オーストラリア週刊誌』とのインタビューの中で、すっかりワイルドにのぼせてしまった若い女性が、ある懇親会の席上、「ああ、ワイルドさん、あなたこそ、私が待ち望んでいた人

なのです」と言って彼に話しかけていた様子などを、短いながらも明確に語っている (Sturgis, *Oscar* 246)。彼女は、講演旅行中のワイルドの身边に寄り添っていたのである。また、ワイルドがニューヨークからの講演旅行の依頼に対して、躊躇することなく即決したであろうとの伝記的推測も、実はヘレンの回想によるところが少なくない (Sturgis, *Oscar* 193-94)。さらに注目すべきは、そもそも、「イギリスにいる本物の審美主義者をアメリカに送り込む」というヘレンの提案には、既にこの段階でワイルドのことが示唆されていたのではないかと推測することもできる、という点だ。というのも、ヘレンのこの提案は、もともと、彼女のニューヨークでの友人で、当時、『フランク・レズリーズ・イラストレイテッド・ニュースペーパー』の主幹となっていたミリアム・レズリー (Miriam Leslie、夫の Frank Leslie は既に死去) のアイデアによるものとされているが、このミリアム・レズリーは、後の 1891 年、ワイルドの長兄であるウィリー・ワイルド (Willie Wilde) と再婚しているからである。ミリアムは、1880 年代初頭から既にワイルド兄弟に関する情報に敏であった。ワイルド抜擢という最終判断に至るプロセスの端緒に、このミリアムが介在し、それが彼女の友人であったヘレンを経由した可能性は十分に考えられよう。

私的な、それゆえ多くは記録に残らない、ニューヨークにおけるこうしたヘレンとの関係は、事務的・形式的なドイリー・カートやモースとのやり取りの中であって、ワイルドにある種の安心感と開放感を与え、さらには創作者としての自らの主体性を目覚めさせる素地になったとも考えられよう。というのも彼は、多くの講演を精力的におこないつつも、新たな創作への道筋を、すなわち『ヴェラ、あるいはニヒリストたち』(1883 年 8 月にニューヨークで初演) の上演準備と『パデュア公爵夫人』の執筆に注力し始めているからである。そこには明らかに、ドイリー・カート事務所の側の微妙な方針転換があり、その変更にあたってヘレンが大きな役割を担っていたのではないかと考えられるのである。彼女はワイルドを、『ペイシャンス』のためのたんなるサンドイッチマンに留まらせることなく、その枠組みにおさまりきれない彼の創作者としての主体性をいち早く見抜き、講演旅行の合間の創作の機会を彼のために担保していたのである⁴。

3. ワイルドを鍛える——リリーとのアメリカでの交流

ワイルドの文学作品の特徴の一つは、二つの対比・対立的テーマや登場人物がきわめて効果的に描出されているということであろう。それが、『虚言の衰退』におけるシリルとヴィヴィアンや『芸術家としての批評家』におけるアーネストとギルバートのように対話形式をとることもあれば、例えば、『まじめが肝心』のセシリーとグウェンドーレンのような人物設定によって、田舎と都会といったテーマを浮かび上がらせるということもある。『幸福な王子』では、一步も動けない彫像としての王子と、街中を自在に飛び回るツバメとの対比が鮮やかだ。『ドリアン・グレイの肖像』の場合、主な登場人物はドリアン・グレイとバジル・ホールワード、ヘンリー・ウットン卿の三者であるが、ドリアンとその肖像の鋭い対比こそがストーリー展開の中心になっていることは言うまでもない。

ワイルド作品におけるこうした対比・対立の構図は、言うまでもなく、たんに固定した二者の対比・対立的関係が示されるだけでなく、両者が往還してしばしば立場を変えるところに重要な意味がある。例えばドリアン・グレイの場合、命あるドリアンと、永遠の美しさを宿した肖像画という基本的な対比がなければ作品は成り立たないのだが、しかし、その肖像画に突き刺さったナイフが、それと同時にドリアンの胸にも突き刺さることではじめて作品世界は完結を迎えることになる。幸福な王子は、初め、宝石類を身につけた輝かしい存在で、貧困や不幸に喘ぐ人々への施しをするのだが、その構図はやがて変化し、施しをしたくても何もない「乞食のような」「みすぼらしい」彫像に変わり果てることで、「鉛の心」は天上に運ばれることになる (*Complete Works* 8:19)。つまり、ワイルド作品における対比・対立の構図は、まず基本的な対比・対立の図式が前提にあり、これがダイナミックに変容することで鮮やかな作品展開がもたらされると言うてよいであろう。ワイルドは、前提としての対比・対立の図式と、そのダイナミックな変容の双方に知悉していた。だがワイルドは、彼の描写の真骨頂とも言える、そして平凡で常識的な人間観・社会観を覆すような、こうした対比・対立的描写のあり方を、どのように身につけていったのだろうか。

ここで注目すべきことは、貧者と富者という対比・対立的関係と、イギ

リスおよびヨーロッパに対するアメリカ、すなわち旧世界と新世界との関係が重層的な構造になっている作品が少なくないということである。しかもこの関係性は、たんに対比・対立的な一般論に終始することなく、自在に立場を入れ替える。富者である新世界が、貧者である旧世界の歴史的価値観をむしろ代弁してしまう、というような場合さえ見られるのである。例えば、『カンタヴィルの幽霊』の場合、エリザベス朝から続くイギリスの大邸宅に興味を示してこれを購入するのは、裕福なアメリカ人のオーティス夫妻である。『なんでもない女』の場合、「あなた方は人生というものを知らない。(中略)社会から品のあるもの、善きものを締め出しているのです」(*Complete Works (Perennial Library)* 449)と、イギリスの富豪に厳しい批判を加えるヘスター・ワースリーは、アメリカの富豪の令嬢である。つまり、貧者と富者、あるいはそれに伴うさまざまな属性の対比・対立的関係をワイルドは自在に往還しつつ創作を進めているのだが、ワイルドのアメリカ体験こそは、こうした対比・対立関係を自在に脱構築していくダイナミズムを与える契機の一つとなっているのではないかと考えられるのである。そしてそのようなワイルドのアメリカ体験に、きわめて大きな影響を与えた人物の一人が、リリー・ラングトリーだったのではないかとと思われるのである。

皇太子アルバート・エドワードの寵愛を受け、ロンドンの社交界にあって一世を風靡したリリーとワイルドの親交は、もちろん、1882年の彼の講演旅行以前、おそらくは1870年代後半に始まっていたと考えられる。ワイルドには「マドンナ・ミア」や「ニュー・ヘレン」など、リリーを念頭に置いて書かれたと思われる詩作があり、彼が彼女への恋愛感情を覚えていたことはほぼ間違いあるまい。リリーの夫エドワード・ラングトリーが1880年に破産し、彼女が社交界の華から女優への転身をはかった後も、ワイルドのそうした感情に変化はなかったと思われる。そもそもリリーが女優に転身したのは、ワイルドの助言によるところが大きい。そのリリーが、1882年10月から翌83年5月まで、東海岸から西海岸に至るまで、大規模なアメリカ公演旅行をおこなった。この公演の企画はアメリカの興行主ヘンリー・ユージン・アビー(Henry Eugene Abbey)によるもので、ドイリー・カートによるワイルドの講演旅行との直接的な接点はないのだが、

同時期にリリーが女優人生の成否をかけてアメリカにやってくるとなれば、ワイルドが行動を起こさないはずはない。彼はさっそくリリーのアメリカ初演を激賞する劇評を執筆している (*Complete Works* 6: 23-25)。

もちろんワイルドとリリーのアメリカでの接点は、劇評だけではなく。ワイルドはしばしばリリーとの面会、会食の時間を取ろうとした。だが、肝心のリリーは、少なくとも強い恋愛感情をワイルドに抱くことはなかったようだ。彼女がアメリカで恋した中心人物は、若き大富豪のフレデリック・ゲップハート (Frederick Gebhard)。二人の関係は、リリーがアメリカを去った後も約10年あまりにわたって続いたとされる。フリードマンは、リリーとゲップハートとの関係を次のように述べている。「ワイルドが、劇評で賞賛したことへの感謝をリリーに期待していたとすれば、彼は大いに失望したであろう。リリーは、自由に過ごせる時間を、ワイルドとではなくゲップハートと過ごしていたのであり、彼は(中略)莫大な金をつぎ込んで彼女を喜ばせ、その傍に居ることをよしとしたのである (*Friedman, Wilde in America* 233)。

ここでいささか奇妙なのは、この失恋が、ワイルドに深刻な影響を与えたと思われる痕跡はほとんどないということである。ワイルドとリリーの親交は、イギリス帰国後も続いて途切れることがなかった。1895年2月の『まじめが肝心』初演時にも、ワイルドは彼女を招待している。しかも、1882年の後半、ワイルドはリリーとは別に、アメリカの女優メアリー・アンダーソン (Mary Anderson) との関係を深めてもいた。『ヴェラ』も『パデュア公爵夫人』も、もともとは彼女がヒロインであることを念頭に書き進められたものである。もともと、メアリー・アンダーソンとの関係は、必ずしもリリーとのそのように強く継続的であったとは言えず、やはりリリーへの思いがワイルドに強かったことは確かであろう。しかしそれにもかかわらずワイルドは、富豪への敗北に意気消沈することなく、意欲的な執筆活動を展開していくのである。そこに見られるワイルドの姿勢は、もちろん融通無碍とも言えようが、この融通無碍な性質こそ、別の見方をすれば、リリーへの失恋を、そしておよそ自分自身とは比較にならない富豪との対決を、貪欲に吸収して自由な創造性へと昇華していく強靱にしてしなやかな創作者としての姿勢を生み出す源泉となったのではあるまいか。

貧者と富者、あるいは旧世界と新世界といった既存の一般的・常識的な対比・対立的関係を自在に越える自由で開放的なワイルドの創造性は、まさにこの延長線に見出すことができるように思われる。この意味において、リリーとのアメリカでの交流は、致命傷を与えることなくワイルドを鍛え、彼の作品世界の原点を確かなものにする一つの重要なステップであったとも言えよう。

4. ワイルドを定位する

—メアリーに至るアメリカのワイルド・コレクション

リンダ・ダウリングは1978年に刊行した『審美主義とデカダンス—書誌情報解説選』の序文において次のように述べている。

ヴィクトリア朝世紀末の文学的題目、すなわち1880年代の芸術至上主義と90年代の退廃的な猥雑さは、今もなお若々しい題目である。それはたんに、1880年から1900年にかけての同時代的な議論の中心であっただけでなく、現代批評そのものの基調にも強い影響力を発揮している。ここ100年にわたって、世間の注目を集め、非難され、回顧され、真相を暴露され、また再発見や修正がなされてきたが、この題目は今なお人々を広く魅了し、いささか限定的でどぎつさがあるものの、ヴィクトリア朝最後の20年に関する最も重要な題目であり続けているのである。(Dowling vii)

この世紀末の20年を駆け抜けたワイルドの業績は、ダウリングが書誌をまとめた1970年代後半のみならず、21世紀の現在にあってもなお「若々しい題目」と言ってよいであろう。ワイルド文学についてもまさに、「世間の注目を集め、非難され、回顧され、真相を暴露され、また再発見や修正がなされてきた」。ワイルド文学に関する研究と評価は、その中で醸成されてきたものにほかならず、それこそが、ワイルドの取り結んだ「芸術および文化」とのさまざまな「象徴的關係」を体現するものであったとも言えよう。

だが、ここで留意しなければならないのは、そうしたワイルド文学に関する研究と評価を重要な形で支えたのが、彼の諸作品や人生の記録といっ

たもののコレクションであったということである。このコレクションがなければ、彼の文学に関する研究や評価は、現在とは異なる姿になった可能性が高い。彼の死後、きわめて確実な形で構築されたワイルドに関するコレクションは、彼に第二の生命を与えたと言ってもよいであろう。

実はこのコレクション形成にも、アメリカが深く関与している。周知の通り、1895年4月、ワイルドが逮捕・収監された際、チェルシーのタイト・ストリート16番地にあった彼の自宅は、当局によって接収され、家具調度品などとともに貴重な蔵書の大半は公開の売り立てによって処分されている。4月24日のことであった。当時の著名な作家などからワイルドに贈られた署名入りの献本なども、いっさい区別されることなく書物の束として紐で縛られ、売り捌かれたという (*Oscar's Books* 1-7)⁵。ワイルドの最も中心的な蔵書は、そのような形で散逸してしまったのだが、それが再び集積して一大コレクションを形成することになったのは、アメリカのウィリアム・アンドリュース・クラーク (ジュニア) (William Andrews Clark, Jr.)、テキサス大学オースティン校、そしてメアリー・モーレイ・クラッポ・ハイド・エクルズによる貢献が大きいのである。

クラークは1910年から、ワイルドの次男であるヴィヴィアン・ホランドを通じてワイルド蔵書の購入を開始し、そのコレクションが、クラークの死後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校に遺贈されることになった。これが現在の、同校ウィリアム・アンドリュース・クラーク・メモリアル・ライブラリーにおける世界最大規模のワイルド・コレクションである。他方、アルフレッド・ダグラス (Alfred Douglass) のオクスフォード大学モードリン・コレッジにおける後輩で、ダグラスと同じ部屋に起居した経験を持つベルファースト出身のハートフォード・モンゴメリー・ハイド (Hartford Montgomery Hyde) は、弁護士や国会議員の務めを果たしつつ、ワイルドに強い関心を持って彼に関する貴重書を収集した。このコレクションは、ハイドの死後、テキサス大学オースティン校に遺贈されることになった。現在の同校ハリー・ランサム・センターにおけるワイルド・コレクションの基盤となったものである。両大学とも、有力な個人コレクションの遺贈を受けて、そのコレクションを着実に発展させ、読者・研究者に広く公開して今日に至っていることは言うまでもない。

この二人の個人コレクターよりも時代的には少し遅れて、しかしある意味ではそれゆえに重要なワイルド関係のコレクションを構築し、死後、そのコレクションを大英図書館に遺贈したのが、メアリーである。エリザベス朝演劇研究によってコロンビア大学から博士号を取得していた彼女は、近代英文学に関するアメリカ最大のコレクターであるドナルド・F・ハイド (Donald F. Hyde) と結婚した後、鋭い文学的鑑賞眼をもって独自の文学的コレクションを形成していくのだが、その彼女のもとに、1960年代後半、エドワード・コールマン (Edward Colman) から、ダグラス書簡 (ジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw) とのやり取りを中心にしたもの) の購入の打診が来る。コールマンは、1945年に亡くなったダグラスの文学関係の遺言執行人であり、彼女への打診の背景には、メアリーが夫とともに築いたコレクションの中に既にダグラス書簡の一部が含まれていたという事情がある。1969年、彼女はコールマンから打診のあったダグラス旧蔵の書簡を一括購入し、その後の詳細な調査や資料の追加を経て、1982年に『バーナード・ショーとアルフレッド・ダグラス―書簡集』を刊行している。メアリーはその後も、イギリス世紀末に関するコレクションの充実を図り、それが大西洋をわたって大英図書館に遺贈された際には、初版本などの貴重書のほか、原稿や草稿、メモ類、19世紀末イギリスの比較的マイナーな雑誌類などを含めてのべ1,500点を越す一大コレクションとなっていた。

メアリーに至るこうした重要なワイルド・コレクションの形成には、もちろんその背景に、アメリカが全体として有する国力や資金力があつたことは間違いない。個人や大学図書館が、比較的自由に資料を購入し、コレクションを充実させる環境が整っていなければ、こうしたコレクションは構築されえず、そして、そうした基本的なコレクションが構築されて公開されなければ、研究も批評も、また更なる資料調査や未発見資料の発掘もおぼつかない。経済偏重の社会に異を唱えた審美主義の旗手ワイルドの文学的言動から見れば、それはある意味で皮肉な出来事であったと言えるかもしれないのだが、しかし、逮捕・受刑に至ったワイルドの文学的真価が、いったんイギリス・ヨーロッパ的文脈を離れてアメリカで体系化されて行ったことの意味はやはり大きいと言わなければならないであろう。世紀末文

学における当事者同士の好悪の情、ワイルドへの強い社会的偏見、関係者のやり取りが生々しく記されている書簡類を公表することへの忌避、初版本や献呈本等の貴重書の散逸と収集の困難さ——これらの問題が、ワイルドの場合、彼の死後、アメリカを通じてみごとに克服されることになったのである。こうした経緯を勘案して改めて1882年のアメリカ講演旅行における彼の一連の言動を俯瞰してみると、そこには、一見軽薄に見える「アメリカの印象」を声高に語った姿のみならず、実はその財力や国力をも視野に入れて「芸術および文化」とのさまざまな「象徴的關係」を築こうとしていたワイルドの、自由でより広い視座と慧眼が見えてくるのである。

5. むすび

イギリス文学史におけるアメリカ、もしくは大西洋往還にかかわる論述は、18世紀末のアメリカ独立戦争を一つの境として大きく変貌する。それまでの冒険的紀行文学や植民地支配の構図は姿を消し、アメリカは関心の埒外となって、ヴィクトリア朝文学の中心的舞台は、大英帝国となったイギリス国内に収斂していくかの様相を呈しているからだ。しかし、19世紀末を駆け抜けたワイルドは、そうした状況に一種の閉塞感を覚え、芸術至上主義をもって彼の文学を広く世界に開いたと言えよう。アメリカは、彼がそうした独自の文学的世界を構築しようとしたとき、その基盤となっていた。本論文で考察したヘレン、リリー、メアリーという三人の女性は、いずれもアメリカ的背景の中でワイルドと多様な関係を結び、ワイルド文学に見られる独自性を豊かに育んだのではないかと思われる。ワイルド研究におけるアメリカは、1882年における彼のアメリカ講演旅行を一つの端緒としつつも、たんにその一年間の彼の言動にとどまらず、その独自の文学的世界の深奥に迫る重要な一つの手がかりを有していると考えられるのである。

*本稿は、日本ワイルド協会第46回大会(2021年12月11日、オンライン開催)におけるシンポジウム「ワイルドから見るアメリカ/アメリカから見るワイルド」における口頭発表「ヘレン、リリー、メアリー——ワイルドとアメリカ再考」の原稿および配布資料に大幅な加筆修正を施したものである。

注

- 1 本論文では、人名、地名、作品名等はすべて日本語表記とし、必要に応じて、原語や出版年等を付記した。引用は原則として拙訳によって示し、原文の出版情報等を併記した。なお、本論文の中心となる三人の女性の呼称については、原則としてファースト・ネームによるものとした。
- 2 ワイルドは、ハーバート・アレン・ジャイルズ (Herbert Allen Giles) による『莊子—神秘主義、道学者、そして社会改革者』(1889) が刊行されると、翌年、さっそくその書評を『スピーカー』誌に掲載している (*Complete Works* 7: 237-43)。1882年のアメリカ講演旅行の際にワイルドが日本訪問を希望していたことは、彼がその訪問を断念したことを伝える『ジャパン・パンチ』(1883年3月号)の記事などにもうかがえる。
- 3 ワイルドのアメリカ講演旅行実現の経緯については、Friedman 50-51、Sturgis 199などを参照。
- 4 実際、『書簡集』における1882年のワイルドとドイリー・カートとのやり取りには、次第にワイルドの創作に関する話題が増えてくる。この変化に、最もワイルドに身近に接していたヘレンの介在がなかったとは考えにくい。またヘレンは、ロンドン帰国後のワイルドの講演や、彼と論争を展開していたホイッスラー (James Abbot McNeill Whistler) の講演をロンドンで準備するなど、当時の知的・芸術的動向を察知するにもきわめて敏であった。Ellmann 255も参照。
- 5 この1895年4月のワイルド蔵書の売り立てに際しては、購入者の詳細も依然として不明なものが多い。例えば、オランダ国立図書館でメーテルリンク (Maurice Maeterlinck) やスタンダール (Marie Henri Beyle Stendhal) らの署名入り本が発見され、これがワイルド旧蔵書であることが明らかにされたのは2014年のことである。同館はこの時点でワイルド旧蔵本を5点所蔵していたが、同館のような公的機関に所蔵されているワイルド旧蔵本は、現在でも40点程度にとどまっている (<http://charlesricketts.blogspot.com/2014/12/175-books-from-oscar-wildes-library.html>)。

引用および参考文献

- Beatty, Laura. *Lillie Langtry Manners, Masks and Morals*. New York: Vintage, 2000.
“Books from Oscar Wilde’s Library” (<http://charlesricketts.blogspot.com/2014/12/175-books-from-oscar-wildes-library.html>).
- Dowling, Linda C. *Aestheticism and Decadence A Selective Annotated Bibliography*. New York: Garland, 1978.
- Eden, David and Meinhard Saremba, eds. *The Cambridge Companion to Gilbert Sullivan*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. 1987; London: Penguin, 1988.

- Fitzsimons, Eleanor. *Wilde's Women How Oscar Wilde Was Shaped by the Women He Knew*. New York: Harry N. Abrams, 2016.
- Friedman, David M. *Wilde in America Oscar Wilde and the Invention of Modern Celebrity*. New York: Norton, 2014.
- Gillespie, Michael Patrick. *Branding Oscar Wilde*. London: Routledge, 2018.
- Hofer, Matthew and Gary Scharnhorst, eds. *Oscar Wilde in America The Interviews*. Illinois: U of Illinois P, 2013.
- Holland, Merlin and Rupert Hart-Davis. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. London: Fourth Estate, 2000.
- Hyde, H. Montgomery. *Lord Alfred Douglas A Biography*. London: Methuen, 1984.
- . *Oscar Wilde A Biography*. New York: Da Capo, 1974.
- . *The Trials of Oscar Wilde*. London: W. Hodge, 1948.
- Hyde, Mary. *Bernard Shaw and Alfred Douglas A Correspondence*. 1982; Oxford: Oxford UP, 1989.
- Mendelssohn, Michèle. *Making Oscar Wilde*. Oxford: Oxford UP, 2018.
- Oost, Regina B. *Gilbert and Sullivan Class and the Savoy Tradition, 1875-1896*. Farnham, Surrey: Ashgate, 2009.
- Sampson, George. *The Concise Cambridge History of English Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 1970.
- Sturgis, Matthew. *Oscar A Life*. London: Head of Zeus, 2018.
- Tipper, Karen Sasha Anthony, ed. *Lady Jane Wilde's Letters to Oscar Wilde 1875-1895 A Critical Edition*. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 2011.
- Ward, A. W. and A. R. Waller. *The Cambridge History of English Literature*. 15 vols. Cambridge: Cambridge UP, 1916.
- Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. General eds., Russell Jackson and Ian Small. Oxford: Oxford UP, 2000-. (現在第11巻まで刊行中。)
- . *The Complete Works of Oscar Wilde*. Perennial Library. New York: Harper, 1989. (出典情報に際してPerennial Libraryと付記した。)
- Wright, Thomas. *Oscar's Books A Journey around the Library of Oscar Wilde*. London: Vintage, 2009.
- Zachs, William, ed. *Mary Hyde Eccles A Miscellany of Her Essays and Addresses*. New York: The Grolier Club, 2002.